

黙示録の記録

第5章 小羊が相応しい

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

黙示録の記録

目次

- 第5章 小羊が相応しい
- 第6章 創造主の大いなる怒りの日
- 第7章 大患難における聖徒たち
- 第8章 外からの攻撃を受ける地球
- 第9章 悪魔的災害

第5章 小羊が相応しい

運命の書

黙示録の第五章は、今まで書かれた最も荘厳な章の一つです。舞台設定の荘大さは比べるものがなく、主題はまさに世界の運命そのものです。創造主は地球大気の上高く据えられた荘厳な御座に座し、エメラルドの虹に取り巻かれ、さらに贖われた人である長老たちに囲まれていました。

しかし、すべての聖徒の復活と携挙によって、地の「塩」を取り去られた地球そのものは、急速に邪悪と暴虐の泥沼に陥り、かつてないほど腐敗しています。地球を贖う代価はずっと昔カルバリーの十字架で払われましたが、地は邪悪な者「ヨハネの手紙5章19節」の力と、なお固く結びついているので、地球の現実の贖いは、なお成し遂げなくてはなりません。それは、あたかもある人が一つの地所を購入し、その地所に対し法的に

明らかかな権利を持ったのに、その地所を占有した不法な強奪者によって、締め出されているかのようです。事実その通りで、地球の最終的な贖いはまだ終わっていません。「これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上になげなさい。贖いが近づいたのです。」「ルカによる福音書21章28節」とイエスさまは言いしました。「またあなたがたも、……約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神（創造主）の民の贖いのためであり、神（創造主）の栄光がほめたたえられるためです。」「エペソ人への手紙1章13、14節」。この荘厳な黙示録5章で、地球の大いなる贖い主は、買い取られた地球（と、その中にいるすべて）を清める作業を完成させる準備をしています。

黙示録5章1節 また、私は、御座にすわっておられる方の右の手に巻き物があるのを見た。それは内側にも外側にも文字が書きしるされ、七つの封印で封じられていた。

御座についておられる威厳のある創造主の臨在は、虹から放出される光で隠されていたが、今しがた、そこにあたかも人の右手があり、珍しい巻き物をつかんでいるかのように思われました。巻き物には文字が表にも裏にも書かれていた。それはしっかり巻かれており、七つの頑丈な封印で封がなされていました。

しかし、この注目すべき巻き物は一体何なのでしょうか。地球の地権証そのものです。このことの説明は、直接本文でなされていませんが、明らかに旧約聖書で土地回復のために創造主が特別に定められた過程に関連しており、旧約聖書に前もって示し教えられている豊富な事例すべてが新約聖書に記されているのであり、黙示録のここで記されたとおりにその成就を見ているのです。

まず第一に、地球は創造の権利によって永遠に創造主の所有物です。何もものこの事実を変えることはできません。「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。」「詩篇24篇1、2節」。このことが象徴的に意味するのは、選民である各家族への創造主からの変わらない創造主の土地の一部を贈り物として与えられたことに示されています。「地は買い戻しの権利を放棄して、売ってはならない。地はわたしのものであるから。……あなたがたの所有するどの土地にも、その土地の買い戻しの権利を認めなければなりません。もし、あなたの兄弟が貧しくなり、その所有地を売ったなら、買い戻しの権利のある親類が来て、兄弟の売ったものを買い戻さなければなりません」〔レビ記25章23、25節〕

ちょうどイスラエル人がしばしば土地を売ったり失ったりしたように、アダムは創造主によって与えられた地球に対する統治権を失ったのです。サタンは「この世の神」になりました〔IIコリント人への手紙4章4節〕。しかし、この立場はただ表面上の一時的立場に過ぎません。なぜなら「地は人の子らに与えられた」〔詩篇115篇16節〕からです。

イスラエルでは、失われた地所は近親者ならだれでも売った値段で買い戻すことができました。しかし、地球を買い戻すことのできる唯一の方は創造主ご自身で、アダムの親戚の男子でなくてはならず、創造主ご自身が、まず人に、即ち、第二のアダムにならなければならなかったのです。さらに、買い戻しの値は単なる金銭ではあり得ません。「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなし生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの尊い血によったのです。キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現

われてくださいました。」〔イヘテロの手紙1章18〜20節〕

創造主の罪のない小羊は世の罪を取り除かなくてはなりません〔ヨハネ1章29節〕。しかし、代価が払われた後であっても、買い取った地所の買い戻しが完了する前に、強奪者は追放されなければなりません。とはいっても、地球の正当な所有者、創造主である小羊は地球を去って天におられます。そこで、贖われた人々のためのホームとして大きな都市を準備しています。それは、キリストが地球を所有するために帰って来られるとき、彼ら贖われた人々をもご自身と共に連れ戻すためにです。

この様子は、旧約聖書に前もって実例を挙げて描写されています。それは、バビロン捕囚の間ユダヤの全国民がイスラエルの地から長い間不在になっていた時の事です。創造主は最終的に彼らの土地を回復して下さると信じた証拠に、預言者エレミヤは、買い戻しの権を持つ近親者として広い土地を購入しました〔エレミヤ書25章11節〕。彼はバビロンの侵入者が、70年の長い間、その土地を略奪することを知った上で、土地を購入したのです。

その取り引きの証拠は、侵入者が追い出され正当な相続人が権利を主張して帰って来る時まで隠されることになっていました。「すなわち、証書に署名し、それに封印し、証人を立て、はかりで銀を量り、命令と規則に従って、封印された購入証書と、封印のない証書を取り、おじの子ハナムエルと、購入証書に署名した証人たちと、監視の庭に座しているすべてのユダヤ人の前で、購入証書をマフセヤの子ネリヤの子バルクに渡し、彼らの前で、バルクに命じて言った。『イスラエルの創造主、万軍の主は、こう仰せられる。これらの証書、すなわち封印されたこの購入証書と、封印のない証書を取って、土の器の中に入れ、これを長い間、保存せよ。まことに、イスラエルの創造主、万軍の主は、こう仰せられる。再びこの国で、家や、畑や、ぶ

どう畑が買われるようになるのだ』と。」〔エレミヤ書32章10〜15節〕

売買の不動産証書は書かれ封印されました。また複写も造られました。複写されたものは、封印された原本に何が書いてあるかを証言し、記録と参照のため用い得るように封印されずにおかれました。しかし、封印されていない複写で証明された正当な所有者だけが、封印された原本の封印を解く事が出来るのです。その持ち主が名乗り出て、その封印を破り、おおよけの権利証書と正当な持ち主であることを示すまで、その取り引きは完全には完了されなかつたのです。証書を安全に保管する場所がなかつたので、エレミヤの場合、証書2冊ともに埋められました。エレミヤは、創造主が何らかの方法で相続を主張するために彼の相続者が帰って来る導きをする事を知っていました。

この世はだれのものか

これが黙示録をひもとくすばらしいドラマの背景です。小羊は失われた世界を再生するための代価を払っておられ、いわば、創造者である主が保管するため、権利証書は交付されました。それはキリストが侵入者を追い出し、愛情を込めて買い取られた所有物の買戻しを完全に成し遂げるために帰って来るまでです。

天にある地権の巻き物は二つではなく一つです。しかし、その趣旨は同じです。その内容は明らかに簡潔なものです。そこには全世界のための代価が払われていること、そして小羊が相続権を持っている事実だけが記されていますが、それは七つの封印でしっかりと封印されています。しかし、同じ簡潔な情報が裏側または外側にすべて見えるようになっていて、二つの巻き物を必要とほしないのです。もし人がただ信じ

さえすれば、このことばはすべての造られた者に、小羊は贖い主であり、やがて所有権を主張するために帰って来て、王の王として世界中で認められると言う事を公表しています。

黙示録5章2節　また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言っているのを見た。

しかし、まず、第一に贖われた総ての者と同様天の軍勢すべての目前で、相続権を主張する資格のある者が地上に誰もいないことが証明されなければなりません。一人の天使（すなわち、なみの天使ではなく、天の軍勢の中で最も位の高い天使、おそらくガブリエル自身と思われる力ある天使）が、大いなる仲間聞こえるような雷のような声で時が近づいていると宣言します。この世は長すぎるくらい、巨大な悪魔によって略奪されてきました。そして、彼は彼に従う世のすべての人と悪霊とともに永遠に追放され、滅ぼされなければなりません。しかし、「地をその果てから果てまでその所有として」「詩篇2篇8節」能力と権利の両方を兼ね備えた近親者であり贖い主である方は、誰でどこにおられるのでしょうか。

黙示録5章3節　しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻き物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかった。

正当な継承者が誰か決定されなければなりません。その描写は実に独特で、おそらく、七つの巻き物の表に見える所にはつきりと書き出されていたことでしょう。一つには、天使ではなく、人でなくてはなりません。なぜなら返還されなければならないのは人の失われた地所だったからです。天にある御使いのどの群も、そして確かにサタンにつく悪鬼の群もその資格はないのです。

しかし、今、御座の回りの天には、救い出された多くの人々を含め、何十億もの人々がいます。しかしこれらのうちだれ一人として贖い主として資格のある人はいません。なぜなら、彼らの魂そのものも贖われるべき財産に含まれているのですから。世が失われたのは人の罪によるのですから、罪人、または罪人であった人はだれ一人その地所を買い戻すことはできません。その代価は完全にきよい生命です。それは世人たちの罪のため身代わりの苦しみと死を受けるときに流す血によって与えられた生命です。「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神（創造主）の豊かな恵みによることです」「エペソ人への手紙1章7節」。

人の歴史が始まって以来、「義人はいない。一人もいない。」「ローマ人への手紙3章10節」のです。そして、もして資格のある方が一人もいないなら、まして地上にいる、または地下のハデスにいる贖われていない人は、もつと資格がないのです。彼らはなお自分の罪のうちに留まっています。なぜなら「すべての人は罪を犯したため、神（創造主）の栄光を受けられなくなつて」「ローマ人への手紙3章23、協会訳」いるのです。

御座を取り巻く聖徒たちのだれ一人、自分に資格が本当にあるかどうかを知らうとして、その書をあえて見ようとはしません。彼らはみなキリストの御前できよめる火を経験して、キリストに似るものとされたのです。「ローマ人への手紙8章29節」。しかし、これはただキリストの恵みによるので、彼ら自身の功績ではありません。巻き物を開くことのできる方は、御自身の徳でその価値を持つことが証明されており、その権利によって巻

物を開かなくてはならないのです。

黙示録5章4節 巻物を開くのにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は激しく泣いていた。

携拳された聖徒の一人として、ヨハネは畏敬の念をもってその光景を見ています。しかし、懸念もまた増しています。強力な侵入者、地上にある悪霊の群とサタンに従う人々を取り除き続ける準備のすべては整っていると思われましたが、地球の地権証に対する正当な権利を主張する者は見出されていなかったのです。巻物は封印されたままでした。そして封印が解かれるまで、さばきは行われませんでした。ヨハネは、おおいに興奮して、何かまだ十分な確信を持ってないままで、ヨハネが見聞きしたすべてにもかかわらず、贖いのわざがなおその完成に至らなかったのではないかと疑い始め、ついに、ほぼ絶望して、すすり泣いてしまいました。

黙示録5章5節 すると、長老のひとり、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。」

この時点で、ヨハネの必要にこたえてやって来たのが天使ではなく、一人の長老であったことは大切です。その長老はヨハネと同様に贖われて喜びに満たされていた聖徒で、どの天使よりもヨハネの関心事の深さを理解していました。しかし、ヨハネとは異なり、その長老はキリストの復活のときハデスからキリストによって救出された人々の一人で、救い主と長い間天にいたのです。「長老」として、彼はおそらくヨハネが生まれる前に地上で巡礼の旅を生きた方であり、このような長い経験は彼に独特の直観力を得させていたことでしょう。

彼はおそらく古代の族長の一人で、多分ユダ自身であったでしょう。だれがヤコブの死の床で来るべき救い主について語った預言の意味を最もよく知り得たでしょうか。「ユダは獅子の子。……王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにシロが来て、国々の民は彼に従う」(創世記49章9～10節)。

ヨハネの時代までに、ローマ人はエルサレムを滅ぼし、ユダヤ人は離散していました。王権は実際にユダから離れてしまい、それゆえ、シロはすでに来ていた、約束の王、ユダ族の獅子である。しかし、おそらくそれらの古代の時代には「国々の民は彼に従う」とは何を意味するか完全には理解されていなかったことでしょう。

今やすべてを理解したのです。全時代の全ての国々の贖われた人々すべてが、キリストの下に皆一緒に集められていて、偉大な征服しつつある獅子としてのキリストの顕現を熱烈に待っていたのです。

ユダ族の中で、選ばれた家族はエッサイで、油注がれた王はダビデでした。ユダビデの根は、また「ダビデの子孫」(黙示録22章16節)でした。ダビデの根は「権威を持つ者」を来たらせました(エゼキエル書21章27節)。

彼の権威はすでに証明されていました。なぜなら、その巻き物を紐解(ひもと)くことが出来るからです。聞き始めていたからです。このことばは教会への手紙で「勝利を得る者」に用いたことばと同じで、またコロサイ人への手紙2章14、15の「凱旋」にも用いられています。「いろいろな定めのために私たちに不利な、

いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神（創造主）はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。神（創造主）は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。キリストは人の子であっただけでなく、キリストはユダの獅子であり、ダビデの根でした。キリストは御自身を十字架につけ、その犠牲によって罪を取り除き、父の被造物を強奪した邪悪な者の力に打ち勝ったのです。ヨハネの涙は止まりました。それは、ヨハネが封印を破ろうとし征服しつつある高邁な獅子を見るために向きを変えた時の事でした。

黙示録5章6節 さらに私は、御座るそこには、四つの生き物がいる。と、長老たちとの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。これに七つの角と七つの目があった。その目は、全世界に遣わされた神（創造主）の七つの御霊である。

しかし、彼が期待した偉大な獅子の代わりに、ヨハネは真ん中に立っている小羊を見ました。それは、創造主が創造された最もどう猛な動物の代わりに最も柔和な動物です。ライオンと同様に、この小羊は明らかに象徴的です。しかし、象徴している意味は明らかです。

ヨハネが栄化された人の子〔黙示録1章13、16節〕を初めて見たとき、獅子の象徴はふさわしいものだったでしょう。しかし、今、御座を取り巻いている虹の光の中にあつて、同じ聖なる人が異なる衣を着て現われました。勝利を得つつある王はまず耐え忍んでいるしもべになりました。贖いの代価を十分に支払うことは創造主の小羊としての資格です。したがって、恵みの時代を通して安全に保管されていた創造主の御手から、地権の

巻き物を受け取らなければならないのは小羊としてなのです。

「葬られたと見える」小羊が立っているのにも注意してください。立っているだけでなく生きています。彼を死に追いやった傷はなお見えますが、キリストは「いつまでも生きています」〔黙示録1章18節〕方でした。

小羊の姿は他の点で特徴がありました。すなわち「七つの角と七つの目」です。七つの目は七重の聖霊の働きを現わしており、すでに述べた通りです〔黙示録1章4節、4章5節〕。しかもゼカリヤ4章10節に言及しています。

「だが、その日を小さな事としてさげすんだのか。彼も、ゼルバベルによってより分けられた石を見て喜ぼう。これらの七つは、全地を行き巡る主の目である」と。

ゼルバベルは、ユダヤ人がバビロン捕囚から帰って来た後、宮を建てる責任者でした。こうして、ゼルバベルは、創造主の所有に戻す身受け人である救世主の型として役立っているのです。回復された宮の「小さな事」とは、全地球の類型でした。全地球はいつの日か回復されます。そして、主がご覧になるように全地球を見ている七つ目は、やがて来る大いなる日をヨハネに気づかせたようにゼルバベルにも気づかせたのでした。

ゼルバベルと同時代の同僚は大祭司ヨシユアでした。創造主は彼に同じようなメッセージを与えました。「聞け。大祭司ヨシユアよ。……見よ。わたしは、わたしのしもべ、一つの若枝を来させる。見よ。わたしがヨシユアの前に置いた石。その一つの石の上に七つの目があり、見よ、わたしはそれに彫り物を刻む。万軍の主の御告げ。わたしはまた、その国の不義を一日のうちに取り除く。」〔ゼカリヤ書3章8、9節〕

「若枝」はまたもや「ダビデの根」であり、また来るべき救い主の名です。この約束のしるしとして、創造主は「七つの目」を彫り込んだ石をヨシユアに与えました。ゼルバベルには、七つの目は地球回復のしるし

でした。ヨシユアのためには、七つの目は地球が将来浄化されることの象徴でした。回復と浄化は共に来るべき贖い主によっていつか完成されるでしょう。

「七つの角」は別のヨシユア（もちろんヨシユアという名はイエスと同じです。）に対する類型的言及かも知れません。創造主が約束された自分たちの地であると主張するため、イスラエルの子たちがはじめてカナンの地に入ったとき、邪悪な町が彼らの進路をさえぎっているのに出くわしました。創造主の命令に従って、祭司たちが「雄羊の角の七つのラツパ」を吹き鳴らしたとき、エリコの城壁は崩れ落ち、エリコと異邦の民は滅ぼされました。こうして、これらの小羊の「七つの角」は、創造主の民が約束の地を受け継ぐために入るのに有効であったヨシユアの七つの雄羊の角をヨハネに思い出させたと言ってよいでしょう。さらに、ラツパとして雄羊の角が用いられたことは確かにヨハネを創造主の御座に引き上げたラツパをも彼に思い出させました。

こうして、天にある小羊の七つの角と七つの目は、イスラエルと全世界に対する偉大なる救いの約束すべてをヨハネに思い起こさせたことでしょう。実際に、イエス御自身は「救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた」（ルカによる福音書一章69節）と言われているのです。

黙示録5章7節　小羊は近づいて、御座にすわる方の右の手から、巻き物を受け取った。

ついに、ヨハネをはじめとする大群衆が待っていた劇的瞬間が来ました。小羊が地権書を受け取るためにやって来ました。そして御座についておられる方が小羊にその地権書を手渡されました。こうして、殺され

たがなお生きておられる小羊は世の贖い主であったことが全世界に認められたのです。

ダニエルは幻でこの同じ大いなる出来事を見ました。「私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない」（ダニエル書7章13、14節）。

ダニエルは幻を見たに過ぎません。したがって、そこで、出来事の順序が完全ではありません。ヨハネは実際の出来事を見ました。なぜなら、キリストはそこにおり、聖徒たちと共に創造主の御座の前に引き上げられていたのですから。ヨハネの「小羊」はダニエル書にある人の子と同じです。そして、地権証の巻き物の封印が解かれる時、キリストに与えられた支配権は実際にキリストによって執行されるに違いないのです。

天使が歌う時

黙示録5章8節　彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっばいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。

これは、携挙された会衆が待っていた合図でした。人類の贖いのために代価を払われ再び戻って来た小羊が、仕事を完成するために封印をまもなく紐解くはずす。

「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」。主は弟子たちにご

のように祈りなさいと教えられ、そして何世紀にもわたって、何百万人ものキリストにある人々がこのように祈ってきました。まだ応えられていない数え切れない祈りが、捧げられていました。また、主は約束していました「あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう」(ヨハネによる福音書14章14節)と。創造主を尊ぶ聖徒たちが信じて祈った祈りはすべて応えられます。しかし、多くの人々は、主が再び帰って来られる前に祈りの応えすべてを見ることはできません。あたかも祈りが高価な香料の入った壺に蓄えられて、主の個人的注意をひく適当な時を待っているかのようです。

聖徒たちの日々の祈りは主にとって確かにかぐわしい香りのようです。ダビデは次のように言っています。「私〔たち〕の祈りが、御前への香として、私〔たち〕が手を上げることが、タベのささげ物として立ち上りますように」(詩篇141篇2節)。荒野での幕屋は香りの祭壇でした。それは丁度、恵みのみ座の前にある垂れ幕のすぐ外側にあり、大祭司は、「あなたがたの代々にわたる、主の前の常供の香のささげ物」(香)を祭壇の上で焚かなくてはなりませんでした(出エジプト記30章8節)。これは、主が臨在する前に、絶えず現れる信者の祈りを美しく描いたものでした。「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神(創造主)に絶えずささげようではありませんか」(ヘブル人への手紙13章15節)。

24人の長老たちは、すべての聖徒の代表であり、外見上、各自は香の入った金の鉢が与えられているようです。その鉢は、小羊の前に長年捧げ、応えられていないすべての祈りの代表です。また、彼らは歌で小羊をたたえるための立琴を持っていました。讚美と祈りの中で、ひれ伏して礼拝する彼ら(換言すると、私たち)は、贖い主に喜んで奉仕する永遠の聖なる務めを始めるのです。

そして、さらに驚くべきことに、四つの生き物が彼らと共に小羊の前にひれ伏しています。造られた全てのもののうち最も力ある天使たちでさえ、創造主が示された大いなる啓示を見たいと願っていました(「ベテロの手紙1章12節」。そして、救いの相続者となる人々が明らかにされ、完成されたとき、天使たちは仕えるべき救いの相続者と共に喜ぶのです。「ヘブル人への手紙1章14節」。

黙示録5章9節 彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、

それから24人の長老たちはおそらく、すべての聖徒たちと共に歌いつづけるでしょう。そして、その歌は、全宇宙でいままで聞いたことのないものでしょう。天地創造において、新しく造られたすべての天使の群と一緒に喜び歌ったとき(「ヨハネ38章7節」でさえ、このような歌は聞かれませんでした。今では贖われた何十億という聖徒たちの新らたにされた声が、彼らの力強い贖い主であり王をたたえるすばらしい讚美に加わりま

きつとその歌は、キリストの降誕のときの天使たちの歌のように地上でさえ聞かれるでしょう(ルカによる福音書2章13節)。

その歌声は大きく鳴り響くだけでなく、ことばと歌も新しいものです。何十億という立琴がすばらしい美を極めた歌声をもつ歌い手たちの伴奏をし、その主題は小羊に対する当然の感謝の歌声です。

24人以上の人々が歌っているのは「あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、国民の中から、神(創造主)のために人々を贖われた」という歌からであることは明らかです。人々には何千もの言語があ

ります。そして、創造主はすべての種族、人々の中に御自身の選ばれた者を隠しておられるという恵み深い約束があるのです。

固有名詞の「私たち」(E)は、最も古い写本の一つには見いだせないことが指摘されています。そこで、長老たちは本当に人なのかどうかについての疑問が起こってきます。しかし、実際にはすべてに出て来るので、それを問題にするに足る正当な理由はないのです。

また、注目すべきは、現在、地にある多くの集会で当惑しているように、天の群衆は、キリストの血をほめたたえる讃美を歌うことで当惑させられることはありません。世を贖うための真の値は救い主の流された血潮でした。

黙示録5章10節 私たちの神(創造主)のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」

黙示録では3回〔黙示録1章6、5章10節、20章6節〕イエス・キリストを信ずる者(クリスチャン)を王とし、祭司とすると言われています。この職務は特に千年王国の時代に当てはまります。その時、彼らに祭司や王が必要なのです。これは実際にクリスチャンの報酬の一部です。「主人は彼に言った。よくやった、良いしもべだ。あなたはほんの小さなことにも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい」〔ルカによる福音書19章17節〕。千年期の間、人々はなお肉体にとどまり地上にいます。しかし、聖徒は、栄化された身体で、天に彼らの住まいがあり、それはおそらく新しいエルサレムで、大気圏の上のほうに留まっています。それにもかかわらず、

彼らは、王としての務めをする必要があるときには、敏速に地球に出入りします。祭司として「エベテロの手紙2章5節」、彼らは霊のささげものをささげます。そのささげものは絶えざる讃美です。「ヘブル人への手紙13章15節」。また、おそらく、千年期の間で救われていない人々に対しては、とりなしと福音伝道の使命もあります。いずれにしても、キリストの約束は私たちが地上と言うよりむしろ地の遙か上から地球を統治するのです。

黙示録5章11節 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。

贖われた大衆とともにヨハネが賛美の歌を歌いながら、天のコーラスにさらに大きなグループが加わったのに気づきました。創造主に仕える無数の天使もそこにいたのです。万という用語は実際は「数えきれない」ということです。したがって、天使の数は無数×無数であり、千の幾千倍というべきです。もちろん、これは正確な数を意味するのではなく、ただ「数えきれない」という考えを伝えているのです。事実、同じ「無数」ということばがルカによる福音書12章1節では「おびただしい」と、ヘブル人への手紙12章22節では「無数」と訳されています。ヘブル人への手紙の言及は、おそらくこの真の集会を望み見てのことでしょう。「しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神(創造主)の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神(創造主)、全うされた義人たちの霊、さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています」〔ヘブル人への手紙12章22～24節〕。

そこに救われた人々の数がどれ程であつても、少なくとも数十億人は確かです。天使の数はさらに多に違いありません。なぜなら、信者はみな彼らを世話するために割り当てられた数人の天使を持つている可能性がある上に、他の勤めを与えられた総ての天使が加わるからです。天使の数は確かに定まっていますが、数え切れないほど多いのです。そして、この数え切れない力ある天使の群れ総てが、宇宙の遙か彼方の天の都にある御座から地上はるか上に留まっている都に集められ、それを受けるに相応しい小羊にささげる美しい賛美を奏でている贖われた聖徒たちと合わせられるのです。

黙示録5章12節 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

大会衆が大声で、(大声、実際に数えられない何十億もの群衆が加わつた折り返し(リフレイン)の大会唱)小羊を讃える力強い七重の頌栄を歌っています。最初の頌栄【黙示録4章11節】は、主に栄光を帰する三重のことばで、創造主の創造の業のためであった。この七重の賛歌は、創造主の贖いのみわざのためです。【黙示録5章9節】。創造主の創造のわざゆえに「栄光とほまれと力」の声を引き出されました。これらはすべて王権に属するものです。しかし、小羊であるキリストの徳はこれらだけでなく「富と知恵と勢いと賛美と祝福」もあります。小羊に帰せられているこの描写のすばらしい見解に更なる洞察を得るために、同じギリシャ語が用いられているいくつかの典型的な対応する言葉を考えて見ましよう。

1、「強へ(power)」(ギリシャ語章ドゥナミス dunamis)

「……強く照り輝く太陽のよう」【黙示録1章16節】

2、「富(riches)」(ギリシヤ語章プロウトス Ploutos)

「また、私の神(創造主)は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」【ピリピ人への手紙4章19節】

3、「知恵(wisdom)」(ギリシヤ語章ソフィア sophia)

「この世の知恵は、神(創造主)の御前では愚かだからです。」【イコリント人への手紙3章19節】

4、「力(strength)」(ギリシヤ語章イスクス iskus)

「(心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし)……力を尽くして、あなたの神(創造主)である主を愛せよ」【マルコによる福音書12章30節】

5、「誉れ(honor)」(ギリシヤ語章ティメー timee)

「……栄光と誉れの冠をお受けになりました。」【ハブル人への手紙2章9節】

6、「栄光(glory)」(ギリシヤ語章ドクサ doxa)

「……栄光と支配が世々限りなく……」【エペテロの手紙4章11節】

7、「祝福(blessing)」(ギリシヤ語章エウロギア eulogia)

「……キリストの満ちあふれる祝福をもって」【ローマ人への手紙15章29節】

黙示録5章13節 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言つたのを聞いた。「御座にすむる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

天使たち総てと贖われた聖徒たちすべてが、小羊を褒め讃える歌と一緒に歌うことだけでは十分ではありません。買取の値は適切であったし、地球の権利証書は承認されました。それは、全地球と人も動物もそこに住むすべてをカバーしていました。創造主は初め、すべての生物をアダムの支配下におかれ〔創世記1章28節〕、ノアと同じことを確認されました。ノアとの契約は永遠の契約で、「地のすべての生き物」〔創世記9章1、2、9、10、16節〕との契約でもありました。しかし、人の罪と地球のサタンへの授与ゆえに「被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしている……」〔ローマ人への手紙8章22節〕のです。

こういうわけで、小羊が巻物を受け取る時、被造物全体が共に歌い、主をほめたたえ喜ぶのが今なのです。苦しみの数千年はまもなく終わり、確かに、悪しきものから贖われなくてはならないものを除き、すべての造られたものは前もって歌っています。

「地の上にある、地の下にあるそして海に住む」ものとして言及されているこれらの生き物たちは、これらの地域で仕えることになっていく聖なる天使たちか、または被造物である動物に対する言及に違いありませんが、おそらく動物に対してでしょう。同じような場面が詩篇148篇7節から10節に叙述されています。「地において主をほめたたえよ。…獣よ。すべての家畜よ。はうものよ。翼のある鳥よ」と。この天に於ける讚美の余韻（反響）が、造られたおびただしい動物に創造主が与えた本能の応答として、次から次へとこだましているのを見出します。ヨハネにとって、それは全宇宙が小羊をたたえているかのように思わせられたのです。まさにその通りで、一つの型なのです。

黙示録5章14節 また、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拝んだ。(英欽定訳章 And the four beasts said,Amen. And the four and twenty elders fell down and worshipped him that liveth for ever and ever.)

すばらしい讚美が終わったとき、贖われた大会衆はひれ伏して拝みました。「永遠に生きておられる方を」〔him that liveth forever and ever〕という節が多くの写本で省かれています。そして、黙示録4章10節から書き写す際に偶然に付け加えられた可能性があるので、いずれにしても、明らかな事は、彼らが礼拝の対象としている方は、御座の真ん中におられる救い出す力のある小羊です。

使徒ヨハネによる簡潔な叙述は、差し迫った将来、筆舌に尽くしがたいすばらしい天にある会衆に何が起るか、その重要な瞬間を纏めているだけで、ヨハネが記録していない事が多少起こるのは疑いない事です。

例えば、この場面に関するかなりの事実が詩篇146篇から150篇（詩篇の最後の5篇）にあります。各詩篇は「主をほめたたえよ」ということばで始まり、終わっています。この節はヘブル人への手紙語でハレルヤ (hallelujah) です。新約聖書で、この語はただ4回用いられています。すべては黙示録19章で1、3、4、6節で、この同じ天の会衆の讚美に関係しています。

これら最後の5つの詩篇の最初が、大いなる讚美のことば (exhortation) 「汝の主をほめよ」で始まっています。そして、各々の信者の応答（反応節）は「ハレルヤ。私のたましいよ。主をほめたたえよ。私は生きていくかぎり、主をほめたたえよう。いのちのあるかぎり、私の神（創造主）に、ほめ歌を歌おう」〔詩篇146章1〜2節〕。それから、最後の詩篇は輝かしいことばで締めくくっています「息のあるものはみな、主を

ほめたたえよ。ハレルヤ。」〔詩篇150章6節〕と。

空中で起こるこの素晴らしい将来の集会とそれに伴って地上に起こる出来事に関してこれら最後の5つの詩篇の詳細な研究は、豊かな洞察と霊的祝福をもたらします。この見解に立ってなされた部分的注解が

『Sampling the Psalms “San Diego” U.S.A. 章 Creation ~ Life Publishers’ 1978』とごう私の本にあります。

天の御座での集会は、黙示録でしばしばみられます〔黙7章11節、11章16~19節、14章3節、19章1~6節〕。最後に、聖徒のこの大集団は、みな甦られた小羊と共に天から行進します。今は征服しつつある獅子、公には、永遠の創造主のことばとして現れ、王の王、主の主としてすべての人によって認められ、地球と全被造物の返還を要求しています〔黙示録19章11~16節〕。